夏のカナダ

時事通信トロント支局
平山真人

カナダの夏。それは突然やって来る。大げさに言えば「鬱」から「躁」への一段跳びであり、静から動への転換でもある。恋人との短い逢瀬を惜しむかのように、カナダ人は夏の太陽と緑を心ゆくまで楽しむ。夏こそはカナダがその本領を発揮する季節である。

と、いささか仰々しい書き出しになったのは、カナダ人の夏への待望感が極めて強いからだ。その辺のところを知ってもらうために、少しカナダの春について語らねばならない。

毎年四月最後の土曜日で、カナダは冬時間から夏時間に変わる。時計の針を一時間早めるだけだが、この一時間の効果は大きい。それまで日没が午後七時過ぎだったのが八時まで延び、サラリーマンの一日の仕事が終わる五時でも陽はまだ高い。こうなると、仕事帰りに買物でもしようか、それとも早目に帰って家庭サービスをしようか、などと考え始める。この時期が夏への序章、つまり春ということになる。

ところが、梅や桜が春の到来を告げる日本と違って、カナダの春はどうも色彩感に欠ける。庭や公園の芝の青さを感じ取れるのは、シーズンを心待ちにしているゴルフ・ファンぐらい。木々の芽も頑固につぼみを開こうとしないし、油断していると雪まで降ってくる。知り合いの雑貨屋の店主は、「春は雪が降るものと観念した方がいい。一九七五年だったか、五月に大雪が降ってね。ナイヤガラ周辺のリンゴ園が大被害を受けたこともある」と、平然としている。

「冬来たりなば春遠からじ」はカナダに通用しない。解放されるべき春が、往生際の悪い冬にいびられている、というのが正直な印象だ。だからこそ、カナダ人は「春よ来い来い」ではなく「夏よ来い来い、早く来い」という気分になるわけだ。

面白いのは、長い冬の反動だろうか、いったん楓の芽が吹き出し、街が一面に黄緑色のもやをかぶったような景観を見せ始めたら、あとは早い。木々はみるみるうちに繁り、芝生はあっという間に緑のジュータンに変化する。冬の間、うす汚れて見えたレンガ造りの家並みが、緑の色添えだけで高級住宅街に様変わりするから不思議だ。これが五月中旬から六月末までの一か月余。カナダの夏が突然やって来ると感ずるのは、このためだ。

せっかくやって来た夏だが、その期間は短い。カナダでは、九月第一月曜日の「レーバー・デー」休日で夏に別れを告げる。だからこそ、カナダ人は夏を有効に過ごそうとシャカリキになる。とくに夏休みは冬の間から計画を練る。

筆者などは、仕事の性格もあって、長期休暇は望み得べくもない。せいぜい一週間が限度だ。カナダに赴任した当初は、「カナダ人は大して働かないくせに休暇は十分とって、いいご身分だ」と、羨望とやっかみ半々の気分になったものだ。順番待ちの長い行列が出来ているのに窓口の係員が少ない郵便局、仕事がたまっていても五時になればサッサと帰るOL…どう見ても勤勉とは思えない。彼らでも最低二週間は休暇をとる。

ある友人に聞いたら、「(オンタリオ)州の法律で最低二週間の休暇を保障しているのさ」という答えが返ってきた。了解。そういえば、連邦議会も七月中旬から九月中旬まで夏期休会となり、カナダの政治は冬眠ならぬ夏眠に入る。ニュースを追う筆者たちが苦労する、〝夏枯れ〟現象も起こる。

友人のカナダ人記者は、『赤毛のアン』で有名なプリンス・エドワード・アイランドに別荘を持っていて、毎夏、家族と一緒に最低一か月は休養するという。筆者ならば、ゴルフ三昧をしたとしても、一か月以上もたないだろう。別荘で何をしているのかというと、特別のことはない。普段目を通せない本を読んだり、散歩したりで、悠々自適の休暇だという。ありとあらゆる名所・旧跡を駆けずり回らないと気の済まない筆者とは、まるで違った過ごし方だ。

味が評判のジャーマン・ベイカリー(パン屋)の店主も、例外ではない。毎年、